

〔論 説〕

挿入詞 Shall I/We Say の変化と間主観化

山 崎 聡

1. はじめに

Shall I say (以下, SIS) あるいは shall we say (以下, SWeS) は, ある言及対象の言い表し方に迷ったり, 言いづらいことの前置きに用いて, 「何とというか, 言ってみれば」のような意味合いのメタ言語的な挿入詞として用いられることがある。この SIS/SWeS (以下, SI/WeS) の用法は複数の英英辞典にもその用法の記載がみられる (1a, b) (以下, 用例中の太字の斜字体は筆者)。

- (1) a. He is, **shall we say**, slightly unusual. (*Longman Dictionary of Contemporary English, 4th Edition (LDOCE4)*, s.v. *say*¹, *shall I/we say*)
b. My involvement has not been altogether, **shall we say**, ethical.
(*Collins English Dictionary*, online (*CED*), s.v. *shall I say*)

(1a) について, *LDOCE4* は “used when you are not quite sure how to describe someone or something” と説明している。一方, (1b) の *CED* (2018年8月閲覧) には, “You use **shall I say** and **shall we say** in order to warn someone that what you are about to say may cause offence or be surprising.” (太字は原文のまま) との説明がみられる。これらの辞書の定義によれば, この挿入詞には, 文脈により, 適切な表現を模索する (以下, 「表現模索」) 用法と, 相手に戸惑いや不快感を与えかねない表現を垣根表現 (hedge) とし て緩和する (以下, 「陳述緩和」⁽¹⁾) 用法とがあると言えよう。

この挿入詞の頻度は決して高くはないが, 次のように映画でも観察される。(以下, SI/WeS が修飾する語句 (以下, host)⁽²⁾ を下線で示す。)

- (2) a. Your father, James, however, had a certain, **shall we say**, talent for trouble. A talent, rumor has it, he passed onto you.
(2004, *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*)
b. Leigh Anne: I understand that you applied for a teaching position at Wingate?
Miss Sue: I wasn't religious enough for 'em. I'm a spiritual person, Mrs. Tuohy, but I have certain, **shall we say**, doubts.

(1) 本稿で「陳述緩和」用法に含めた事例には様々なタイプがあるが, この点については3節でみる。

(2) 挿入詞が修飾する要素を host ではなく, anchor と呼ぶ研究者 (Huddleston and Pullum (2002); Dehé (2014) など) もいる。

Leigh Anne: I appreciate your honesty, Miss Sue.

(2009, *The Blind Side*)

(2a) は Harry の今は亡き彼の両親を知る先生が、若かりし頃の彼らことを Harry に話している場面でのせりふである。ここで SWeS は、talent for trouble という言い方を緩和する hedge として機能しているであろう (CED の定義を参照)。(1b) は引き取った高校生の家庭教師を Miss Sue に任せるか、Leigh Anne が彼女の面接をしている場面である。Miss Sue はかつて Wingate 校の教員採用試験に不採用となったことがあるようだが、その理由として宗教に対してある種の疑念があることが述べられている。ここでは SWeS は適切な表現を模索しつつ用いられているかもしれないが、一方で、微妙な話で、ひょっとしたら相手に戸惑いを与えるかもしれず、この SWeS には言いにくいことを緩和的に導入する働きがあるかもしれない⁽³⁾。

山崎 (2018) は 17 世紀半ばから現代英語 (以下、PDE)⁽⁴⁾ に至るこの挿入詞 SI/WeS の事例を観察して、以下の 2 つ大きな変化を指摘した。

- (3) a. この挿入詞は、当初は SIS で用いることが圧倒的であったが、20 世紀半ばまでには SWeS が優勢となり、PDE ではこちらが標準となった。
- b. この挿入詞は、当初は換言付き修飾型が通例であったが、20 世紀前半の頃より host を単独で修飾する型 (以下、単独修飾型) (1) (2) が徐々に優勢となり、PDE ではこの型が標準的となっている。

(3b) で「換言付き修飾型」とは (4) のタイプの事例を指す。

- (4) a. He had *incorporated*, ***shall I say***, or *insoul'd* all Principles of *Justice* and *Righteousness*, and made them one with himself.
(Early English Books Online (EEBO), 1660, J. Smith, *Select Discourses . . . by John Smith*. . . ; 斜字体は原文のまま ; 以下の用例も同様)
- b. Listen; there is rather a strange coincidence, or ***shall I say*** *fatality* in all this.
(Corpus of Historical American English (COHA), 1910s, Fiction)

(4a) では host の *incorporated* を *shall I say* で修飾した後に、その言い換え or *insoul'd* が続いている。また、(4b) では逆に、先行の *coincidence* の言い換え (*fatality*) を *shall I say* で導入している。いずれの場合も、SIS の host の言い換えを伴うタイプの事例で、本稿でも換言付き修飾型と呼ぶ。(3b) によれば、この挿入詞はかつてはこの換言付き修飾型が通例であり、用例 (1) (2) のような単独修飾型が優勢になるのは 20 世紀からということになる。

さらに山崎 (2018) では、換言付き修飾型と単独修飾型の諸例を観察して、前者は「表

(3) このように、この挿入詞は「表現模索」と「陳述緩和」のどちらにも解釈できることが少なくない。この点については 3 節で詳しくみる。

(4) 本稿では、PDE は概ね 1980 年以降の英語を指すものとする。

現模索」で用いられる傾向が強い一方、後者は当初から「陳述緩和」もしくはそれと解釈される可能性がより高いことが示唆された。そして、この挿入詞は単独修飾型で用いられることが標準となることは、それがより「陳述緩和」もしくはそれと解釈される可能性がより高くなったことを指摘した。しかし、紙幅の都合で、この点を事例で十分に示すことができなかった。この点を検証することが、本稿のひとつの目的である。そして、本稿のもう一つの目的は、(3)で指摘された変化は共に、間主観化 (intersubjectification) の現れとして捉えられ、この意味で当該の挿入詞はより間主観性を高めたことを論じることにある。

以下、2節で山崎 (2018) で指摘された (3) の SI/WeS の2つの変化を概観する。3節では SI/WeS の換言付き修飾型は「表現模索」に、単独修飾型は「陳述緩和」または「表現模索」とであいまいに用いられる傾向があることを、異なる時期の用例で具体的にみていく。4節では間主観化の概念の確認した後、(3)の変化がこの現れとして捉えることができることを論じる。5節はまとめである。

2. 挿入詞 SI/WeS の2つの通時的変化

本節では山崎 (2018) で指摘された挿入詞 SI/WeS にみられる2つの通時的変化 (3) を概観する。まず、当該の調査で対象にしているのは、メタ言語的に host を修飾する用法で、(5) のような事例は調査の対象外であることを確認しておく。

- (5) a. The presence will also be graced by an obscure young expert in military affairs, Koinoff by name, yourself in fact, and the meeting will take place at—**shall we say** the residence of the Archduke John? KOINOFF No, Majesty—the apartments of the Crown Prince Rudolph. (COHA, 1930s, Fiction)
- b. But if you'll have the papers ready, I'll sign them and give you the check. . . **shall we say**—at 10:30 tomorrow morning. (COHA, 1930s, Fiction)
- c. "I'll add in wages for today, of course," Thad said. "I don't see how I can do that, Mr. Aiken." "Just how old are you, Sam?" Thad asked. "I don't see what difference it makes" Sam said. "Well, I'm sixteen, I guess." "Really, Sam. You're getting to be quite a man. Let's see now, that means you must have left school and started working—well, you came into my employ, **shall we say**, at fifteen?" (COHA, 1950s, Fiction)
- d. Feast your eyes on this spot whenever you're feeling a little bit, **shall we say**, grumpy? (COHA, 2000s, Magazine)

まず、(5a, b) では SWeS は共に shall we の「提案」の意味が具現したものと捉えられる⁽⁵⁾。また (5c) では、雇い主の Thad が Aiken は何歳の時に彼の下で働くようになった

(5) このタイプの用例の捉え方は山崎 (2018) の査読者のご教示による。

のか、考えつつ口ごもってSWeSを用いているであろう。(5d)は癒しの食卓についてアドバイスしている文章の一節であるが、このSWeSは「例えば」の意味で事例を挙げているだろう⁽⁶⁾。これらの事例はいずれも本稿で対象としているメタ言語的な用法とは異なることから、調査の対象から除外した。

さて、山崎(2018)では2つの調査が行われた。ひとつはCOHAを利用しての過去200年間ほどのアメリカ英語についての調査、いまひとつはより古い英語のデータを得るために行った、17世紀半ばからPDEに至るイギリス英語についての調査である。いずれも調査の目的は、(1) SISとSWeSの通時的な使用比率の変化を調査する、(2) SIS, SWeSそれぞれについてその単独修飾型と換言付き修飾型の通時的な使用比率の変化を調査することであった。なお、(2)で単独修飾型については、用例(1)(2)のようにhostを前から修飾するタイプ(以下、前置修飾型)と、(6)のようにhostを後ろから修飾するタイプ(以下、後置修飾型)とに分けて集計を行った。

- (6) And, from the Association's viewpoint, the Admiralty's unmerited hostility towards Lord Young is a further indication that its judgment is . . . not infallible, **shall we say?**"
(COHA, 2000s, Fiction)

まず、COHAでの調査結果を表1に示そう⁽⁷⁾。表はCOHAにて検索された挿入詞SI/WeSの生起件数を、1920-29年を除き20年ごとに(A)～(C)のhost修飾のタイプ別に集計したものである。1920-29年のみ10年単位で集計されているのは、後述するように、1930年代を境にSI/WeSの分布の様子が変化し、これと合算するのを避けたことによる。なお、「合計」欄のかっこ内の数値はSIS対SWeSの比率を表す。また、SIS, SWeSそれぞれについて、当該の時期において換言付き修飾型(C)が占める比率及び(A)(B)(C)型全用例中に小説からの用例が占める比率が示してある(表2も同様)。

表1では特に19世紀の生起件数が少ないため、それ以前の時期を含めたイギリス英語について別の調査を実施した。調査はこの挿入詞の頻度の低さにより、各種大規模データベースを利用して行った。具体的には17世紀後半についてはEEBO、18世紀についてはEighteenth Century Collections on Online(ECCO)、19世紀初頭についてはGoogle Books(以下、GB)検索によりデータ収集を行った。EEBOとECCOの検索には、Michigan大学のサイトを利用した。EEBOでは、検索対象をそのPhase Iの1650-1670年出版の著作物に絞り、shall I/we sayの文字列でそれぞれ検索を行った(2017年3月実施)。ECCOでは、1700-1750年と1751-1800年の2つの期間について、shall I/we sayの文字列にてその該当例を求めた(2017年3月実施)。GB検索では、出版年を1801-1830年に設定し、shall I/we sayの文字列で検索を行った(2017年2月実施)。該当例の抽出に当たっては、出版は当該の年代だが、実際にはそれ以前に書かれたもの(例えばShakespeareの作品集など)は除外した。また、アメリカ人による書籍も除いた。次に、

(6) (5a, b)も事例を挙げる用法と捉えることもできよう。

(7) 表1は山崎(2018)の表1の件数に1か所修正を加え、「(C)が占める比率」と「小説からの用例の比率」欄を追加したものである。

表1 挿入詞 shall I/we say の host 修飾タイプ別生起件数 [COHA]

shall I say	1820-39	1840-59	1860-79	1880-99	1900-19	1920-29	1930-49	1950-69	1970-89	1990-2009
前置修飾型 (A)	2	4	4	5	4	5	6	7	4	1
後置修飾型 (B)	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0
換言付き修飾型 (C)	3	3	6	5	11	3	0	4	2	1
合計	5 (100%)	7 (50%)	11 (70%)	11 (58%)	15 (56%)	8 (50%)	6 (15%)	11 (22%)	6 (14%)	2 (4%)
(C) が占める比率	60%	43%	55%	45%	73%	38%	0%	36%	33%	50%
小説からの用例の比率	60%	71%	55%	55%	47%	63%	67%	64%	100%	50%

shall we say	1820-39	1840-59	1860-79	1880-99	1900-19	1920-29	1930-49	1950-69	1970-89	1990-2009
前置修飾型 (A)	0	4	2	3	3	2	23	28	31	39
後置修飾型 (B)	0	0	1	1	0	0	5	8	4	6
換言付き修飾型 (C)	0	3	2	4	9	6	5	4	2	1
合計	0 (0%)	7 (50%)	5 (30%)	8 (42%)	12 (44%)	8 (50%)	33 (85%)	40 (78%)	37 (86%)	46 (96%)
(C) が占める比率	NA	43%	40%	50%	75%	75%	15%	10%	5%	2%
小説からの用例の比率	NA	57%	80%	50%	25%	38%	64%	80%	81%	65%

現代イギリス英語については、British National Corpus(BNC) の1985-1993年の間の書き言葉について該当例を求めた⁽⁸⁾。加えて、1881-1910年と1941-1960年についてGB検索を行ったが、ほとんど該当例は得られなかった。そこで、データの質は全く異なるが、この間の隙間を埋めるため、創刊号以来のThe Times紙を全文検索可能なThe Times Digital Archiveより該当例を求めた(2017年7月実施)。これらの資料より抽出されたSI/WeSの生起件数を、host修飾のタイプ別に示したものが表2である([T]はThe Times紙を表す)⁽⁹⁾。

まず、SISとSWeSの比率の通時的な変化をCOHA(表1)でみてみよう。表1では、当初はSISが優勢のように見えるが、19世紀終わりから20世紀初頭の拮抗期(網掛け部分)を経て、1930年代以降はSWeSが優位となり、PDEではこちらが標準となっていることがうかがえる。ただ、COHAではとりわけ19世紀の生起件数が少ないことから、これ以前の挿入詞の分布状況を含めた、イギリス英語のデータ(表2)を検討してみよう。表2の各種データベースは表1のCOHAとは異なり、統一的なものではない。採取された該当例もEEBOとGB(1801-1830年)では論説文やエッセーがほとんどで、小説からのものは極めて少ない(表2の「小説からの用例の比率」を参照)⁽¹⁰⁾。他方で、18世紀のECCOにて得られた用例は小説からのものが7割(以上)に上る。また、19世紀の終盤から20世紀のデータはThe Times紙からのものである。ところが、興味深いことには、このように事例が抽出されたテキストジャンルが様々であるにもかかわらず、SISと

(8) BNCの検索にはBNCwebを利用した。

(9) 表2は山崎(2018)の表2のEEBO、ECCO、GBの件数にそれぞれ1、2件の変更を加え、「(C)が占める比率」と「小説からの用例の比率」欄を追加したものである。

(10) 表2のSWeSの1801-1830年の「小説からの用例の比率」欄が「*」となっているのは、Google検索時に採取した該当例8例の内5例を記録するのを失念し、その出処が確認できないことによる。なお、BNCのSI/WeSの諸例についてはこの比率のデータは取っていないことから、空欄となっている。

表2 挿入詞 shall I/we say の host 修飾タイプ別生起件数 [EEBO, ECCO, GB, The Times, BNC]

shall I say	1650-1670	1700-1750	1751-1800	1801-1830	[T]1880-1905	[T]1940-1960	BNC
前置修飾型 (A)	3	0	5	5	20	9	3
後置修飾型 (B)	2	1	3	2	2	1	0
換言付き修飾型 (C)	67	3	15	11	21	11	0
合計	72 (97%)	4 (100%)	23 (96%)	18 (69%)	43 (49%)	21 (30%)	3 (6%)
(C) が占める比率	93%	75%	65%	61%	49%	52%	0%
小説からの用例の比率	1.4%	75%	70%	5.6%			

shall we say	1650-1670	1700-1750	1751-1800	1801-1830	[T]1880-1905	[T]1940-1960	BNC
前置修飾型 (A)	0	0	0	2	13	32	42
後置修飾型 (B)	0	0	0	1	2	4	6
換言付き修飾型 (C)	2	0	1	5	29	14	3
合計	2 (3%)	0 (0%)	1 (4%)	8 (31%)	44 (51%)	50 (70%)	51 (94%)
(C) が占める比率 100%	100%	NA	100%	63%	66%	28%	6%
小説からの用例の比率	0%	NA	0%	*			

SWeS の生起比率には一定方向の変化がみられ、また、それは表1のCOHAのそれと類似していることが分かる。つまり、共に19世紀ではSISが優勢で(あることがうかがえ)、19世紀終盤から20世紀初めの拮抗期もほぼ一致している。その後、20世紀の中盤は、表2は新聞のデータであるためか、SWeSの比率がCOHAの同時期のそれに比べて幾分低いが、PDEでSWeSが標準となることでは共通している。そして、表2により、この挿入詞は当初はSISが標準であったものが⁽¹¹⁾、PDEではSWeSが標準となる、という全体的な変化が立ち現れる。

次に、挿入詞SI/WeSにみられるもうひとつの通時的な変化、つまり、換言付き修飾型(以下、(C)型)から単独修飾型への通時的な変化について検討する。表1、表2とも、各時期における(C)型が占める比率が示されているので、これを参照しよう。まず、表1のCOHAのデータではあまりはっきりとした変化のパターンはみられないように思われ、また、用例の生起件数が少ない時期も多く、この点の信頼度も気になるところである。しかし、生起件数も比較的得られ、一定の変化のパターンがみられる期間がひとつあると考えられる。それは、SWeSの1930年代以降の部分で、この期間はSWeSそしてSISのいずれのそれまでの時期に比較して、(C)型の生起比率が際立って低い一方、単独修飾型、

(11) 表2と同じEEBOのPhase1のデータについて、BYU-EEBOにて[shall] I [say]と[shall] we [say]の文字列([]は任意の変異形)で該当例を求めた結果は下表のようであった。16世紀半ばから用例が検索されたが、表2の調査と同様に、当初はSWeSは極めてまれ(該当例1例)であることが分かる。また、修飾のタイプは換言付き修飾型がほとんどで、単独前置修飾型は3例、後置修飾型は1例のみであった。

初期の挿入詞 shall I/we say の生起件数[BYU-EEBO]

	1540-1579	1580-1599	1600-1619
shall I say	2	15	17
sha we say	0	1	0

とりわけ (A) 型の躍進が際立つ。SIS では 1930 年代以降も (C) 型が占める比率は比較的高いが, SWeS に対する SIS の使用頻度は PDE にかけてかなり低くなっている(「合計」欄のかっこ内の比率参照)。したがって, SIS の (C) 型の存在はこの挿入詞全体の使用からみると, 影が薄いと言える。すると, この挿入詞は当初は (C) 型が普通に使用されていたが, 20 世紀の前半の間に単独修飾型が好まれるようになり, PDE では (SWeS にて) 特に (A) 型が標準的となる変化のパターンがみえてくる。

表 2 では, 17 世紀半ばから 19 世紀まではほとんどが SIS の用例であるので, こちらの (C) 型が占める比率をみると, 当初はそのほとんど (93%) が (C) 型で, その後 18 世紀はその比率が下がって行く。GB と The Times では SI/WeS 双方の, BNC では SWeS のデータでみるように, その後も (C) 型の比率は通時的に減少傾向にある。既述のように, なるほど EEBO の該当例はそのほとんどが (宗教的な) 論説やエッセー等からのものであるのに対して, EECO の該当例の 7 割 (以上) は小説からのものである。このテキストジャンルの違いが, (C) 型の減少につながっているという可能性が考えられるが, 1801-1830 年の GB でもその該当例の出処はそのほとんどが論説やエッセーで, EEBO に近いものがある。それでも GB の (C) 型の比率はそれ以前の EECO の数値を超えることはない。また, 19 世紀終盤から 20 世紀中葉にかけては The Times 紙のデータであるが, 概ね (C) 型の減少傾向はみられ, (C) 型から単独修飾型への変化も, テキストジャンルを超えた現象とみてよいであろう。そして, PDE の BNC では COHA と同様に, (C) 型はまれで, とりわけ (A) の単独修飾型が標準的となっている。

以上, 本節では, 山崎 (2018) に基づき, この挿入詞に 1 節の (3a) と (3b) に述べた通時的な変化がみられることを指摘した。さらに, 山崎 (2018) では, (C) 型は「表現模索」に, 単独修飾型は「陳述緩和」, もしくは「表現模索」と「陳述緩和」とであいまい (以下, 「あいまい」) に解釈される傾向がみられることを示唆した。そして, この挿入詞は PDE ではほぼ単独修飾型で用いられるようになったことは, それがそれだけ「陳述緩和」もしくは「あいまい」に用いられるようになったことを意味すると主張した。次節ではこの点を実例で吟味する。

3. Host の修飾型と「表現模索」「陳述緩和」用法との関係

本節では, (C) 型と単独修飾型それぞれについて「表現模索」, 「陳述緩和」及び「あいまい」で用いられている事例を EEBO, ECCO と COHA より例示する。そして, COHA とイギリス英語の各種資料の事例について 3 つの用法の分布を提示し, (C) 型は「表現模索」, 単独修飾型は「陳述緩和」または「あいまい」になる傾向が一般にみられることを示したい。

まず, (C) 型の「表現模索」の用例を検討する。EEBO ではそのほとんどが (C) 型であったが, それらの用例はほぼ「表現模索」で用いられていると考えてよいであろう。3 例用例を挙げる。いずれも SIS は読み手の受け取り方に配慮を示すというよりも, 言及対象をいかに表現したらよいか, より適切な表現を模索して用いられているであろう。(以下, 用例中の点線部分は host に対する言い換えを示す。)

- (7) a. I have heard of many dutifull Children, who have been very serviceable to their Mothers, but have not heard of a Mother so officious (*shall I say* serviceable) to her Children; (EEBO, 1653, J. Fisher, *The Wise Virgin, or, A Wonderful Narration of the Hand of God . . .*)
- b. . . . or wasting the week amongst young gallants, who, to shew their breeding, must los[e] their mony fashionably, pay the box generously, and so they winne, *shall I say*, or rather lose (for unlesse they lose they shall be accounted hard-h[e]ads) the reputation of compleat Courtiers. (EEBO, 1654, E. Gayton, *Pleasant Notes upon Don Quixot by Edmund Gayton, Esq.* [] 内は筆者。)
- c. Amongst the many Simoniacal Prelates that swarmed in the land, *Herbert* Bishop of *Thetford*, must not be forgotten; nick-named (or sirnamed *shall I say?*) *Loseng*, that is, *the Flatterer*; (EEBO, 1655, T. Fuller, *The Church-history of Britain from the Birth of Jesus Christ until . . .*)

ECCO では、文学作品からの用例が7割ほどを占めたが、その(C)型は、やはり「表現模索」と解釈されるものが多い(8)。

- (8) every one of your friends—consenting, *shall I say?*—more than consenting—ardent, to be related to him.
(ECCO, 1753, S. Richardson, *The History of Sir Charles Grandison*)

COHA でも通時的に(C)型では「表現模索」が多い。(9)では、いずれもよりふさわしい表現を模索して先行の語句(点線部分)の言い換え(host)をSI/WeSで導入しているであろう⁽¹²⁾。

- (9) a. After you have read the Revelation of the Sealed Chamber, you will be able to determine how far the Curse,—the Doom—or *shall I say*, the Malady—of our house and race, shaped my purposes, urged me to become either a Wanderer upon the face of the earth. . . . (COHA, 1840s, Fiction)
- b. We knew the situation before the train stopped by the crosses erected on the conspicuous peaks of the serrated ashy—or *shall I say* purple—hills that enfold the fertile valley. (COHA, 1900s, Fiction)

(C)型では「陳述緩和」は少ない。1例のみ用例を検討する。既に用例として挙げた(4b)((10)として再録)は、偶然が重なって今夜は自分の屋敷に留まるしかないと女性に語る男性のせりふで、strange coincidenceを発展させてfatalityという言葉を使って女性に

(12) COHAでは一定の文脈しか参照することができない。より適切な用法判断を行うために、しばしばGoogle Books検索を利用してより広い文脈を検討した。Google Booksが利用できない場合には紙の書籍に当たったものも少数あった。

迫っているように思われる。SIS は適切な表現を模索しつつ用いたというよりも、fatality という言葉を緩和していると考えられる。

- (10) Listen; there is rather a strange coincidence, or **shall I say** fatality in all this.
(COHA, 1910s, Fiction)

最後に、「表現模索」と「陳述緩和」用法とで「あいまい」と考えられる事例をみてみよう。

- (11) a. THE World is now so *laden* and *larded* with *Learning*, as that its not only *fatigued* with the *burden* of it; but also its *fascinated* (**shall I say** *fatuated*) with *such* a *supposed felicity*, as that it *loathes* the *life* of it too (. . .) that's *action*.
(EEBO, 1653, H. Harflete, *A Banquet of Essayes*, . . .)
- b. Hear how the Barbarian proceeded: "I am disposed to regard you, Seymour, as the bosom friend of a brother who is very dear to me; you have many of his best qualities, but you have also (**shall I say**) his defect, or his misfortune: . . ."
(ECCO, 1789 W. Hayley, *The Young Widow; Or the History of Cornelia Sedley*)
- c. "Are you by any chance implying that I am not economical?" "Well, I hadn't intended to, but since you bring it up yourself, I don't mind saying the grocery bills are about twice what they ought to be." "Yes, they probably are. I'm not economical. I can't be. Thanks to you!" "Where d' you get that 'thanks to you'?" "Please don't be quite so colloquial—or **shall I say** VULGAR?" "I'll be as damn colloquial as I want to. How do you get that 'thanks to you'? . . ."
(COHA, 1920s, Fiction)

まず (11a) では、SIS は *fascinated* (とりこになる) の代わりに、より適切な表現として *fatuated* (愚かになる) を模索して用いられていると取れるかもしれない。しかし、読者によっては「人々は学問がもたらすとされる幸いにより愚かになっている」というのは抵抗のある言い方になるので、*hedge* として SIS が用いられた可能性もあり、2つの用法で「あいまい」と考えられる。EEBO ではこのように「あいまい」と判断できる事例は極めて珍しかった。(11b) では、相手の人となりのある部分を *defect* と言っていいのか、*misfortune* と表現したらよいか言葉の選択に迷って SIS を用いているのかもしれない。他方で、相手に対して「彼の欠点 (*defect*)」ももっていると、Brown and Levinson (1987) の意味での *face* を侵害することを言うのであるから、SIS はこれを緩和する働きをしているのかもしれない。(11c) でも、SIS はよりふさわしい表現を模索して用いられているかもしれないが、*vulgar* はあからさまで厳しい言葉であるので、SIS で導入することでそれを幾分なりとも緩和しているかもしれない。(11) はいずれも「表現模索」と「陳述緩和」とで「あいまい」の事例と思われる。

さて、これまで (C) 型の事例についてみてきたが、ここからは単独修飾型の事例を吟

味しよう。(C)型とは異なり、単独修飾型では「表現模索」はより少ない一方で、「陳述緩和」または「あいまい」の事例は17世紀の早い時期から珍しくない。説明の都合で、まずは、(12)に「陳述緩和」と目される用例を提示しよう。いずれも、適切な言葉を模索してSI/WeSを用いているというよりも、読み手(聞き手)に反感や不快感を与えかねない言い方を意図的に緩和する働きがあるのではないだろうか⁽¹³⁾。

- (12) a. Now its time for them [lawyers] and the whole Parliament, unanimously and vigorously to do good, to vindicate their former almost (*shall I say deservedly*) lost honour and reputation, and to secure their Estates to their posterities:

(EEBO, 1659, W. Cole, *A Rod for the Lawyers* . . . ; 角がっこ内は筆者)

- b. With what apprehension (dreading for myself, because of the great, the sometimes almost irresistible, temptation) have I looked upon myself to be (*shall I say ?*) the sole guardian of Olivia's honour!

(ECCO, 1753, S. Richardson, *The History of Sir Charles Grandison*)

- c. LAEL—Because the possibility of enlightening you—if you'll forgive me, Hobart, seems so—*shall we say*—remote? [*He smiles benignly, patiently.*]

(COHA, 1930s, Fiction)

ところで、本稿では hedge としての用法とはやや異なる事例も「陳述緩和」の範疇に含めている。ここではそれのみておく。まず、比喩や洒落など、普通とは異なる言葉の使い方を読者・聞き手に合図する目的で、SI/WeSは用いられることがある。(13a)ではクリケットの試合の観戦者がすでに集まり始めていたが、女性もいて華やいでいたことが blossom with という比喩で表現されている。SWeSはこの比喩を合図している。(13b)ではSWeSが aggressor を後置修飾しているが、「争いで攻撃を仕掛けた側」を表す aggressor⁽¹⁴⁾を、通常とは異なる「最初に声をかけた側」の意味で用いていることを合図するのにSWeSが用いられているであろう。(13c)は野兎(hare)が関わる話で、SWeSは harebreadth が hairbreadth(きわどい)のしゃれであることを読者に合図している。*Oxford English Dictionary, 3rd Edition, Online(OED3; 2018年8月閲覧)*は挿入詞SWeSを成句として取り上げ、“used parenthetically to call attention to a description which is strikingly original or evocative, or (in later use) a knowing euphemism or understatement.” (s.v. *say*, v.¹, P5b)と定義しているが、(13)の用法はこの定義の前半の部分の用法に相当するであろう。

- (13) a. We finished our lunch and found that the crowd had begun to gather and—*shall we say?*—blossom with the presence of the fair sex.

(13) 用例(2a)も参照。

(14) *OED3*の定義“A person, nation, animal, etc., that attacks or assails another, esp. one who makes the first attack or takes the first step in provoking conflict.” (s.v. *aggressor*, n.)参照。

(COHA, 1930s, Magazine)

b. “No. They met here, you see.” “And he had no previous knowledge of her?” “No. Are you implying that he was lying in wait for her or something equally melodramatic?” “My questions don’t imply anything. They’re simply questions. Do you happen to know where they first met?” “At a party at Helen Wilkinson’s. I wasn’t there, so I can’t tell you who introduced whom to whom, or who was the aggressor, **shall we say**. I do know it was love at first sight.” She added dryly: “On her part.” (COHA, 1960s, Fiction)

c. The film treats the story as a straightforward adventure, full of, **shall we say**, harebreadth escapes and ear-chomping fights. (COHA, 1970s, Magazine)

「陳述緩和」の用法の終わりに、先に引用した *OED3* の定義の後半、“a knowing euphemism or understatement” (読み手 (聞き手) も了解済みの婉曲表現や控え目な言い方を合図する用法をみておこう。(14) では、ダイヤモンド取引の内情が語られているが、その内情を世間に知られないようにすることを、SWeS を前置きして public relations (の問題) とまずは婉曲的に述べている^{(15), (16)}。

(14) There are matters of personal safety, of price, of insurance which, to diamond people, is always difficult to come by and costly. And there is the very important matter of, **shall we say**, public relations. To put it bluntly, we don’t want the outside world to know how really easy it is to steal diamonds.

(COHA, 1970s, Fiction)

次に、(15) に単独修飾型の「表現模索」の事例をみてみよう。(15a) では話し手が Bury と Walden Pond のことを対比しつつ語る場面である。(15a) も (15b) も SWeS は適切な表現を模索しつつ用いられていて、聞き手に言いにくいことを緩和するとか、特殊な語句の使い方合図しているわけではないと考えられる。

(15) a. I don’t know just how to distinguish between them [Bury and Walden Pond]. Perhaps Bury is first in my imagination and Walden is first—**shall we say?**—in my soul.” “I see,” Ansie said politely, although of course he didn’t in the least.

(COHA, 1960s, Fiction; 角がっこ内は筆者)

b. He [Professor Hawthorne] and the sheriff settled for bourbon and water. . . . “I

(15) もっとも、この婉曲表現を合図する用法は、言いにくいことをあからさまに述べないという意味で、相手に配慮する hedge の一種と捉えることができるかもしれない。

(16) 「陳述緩和」の範疇に含めた用法を紹介してきたが、これら「陳述緩和」と「表現模索」を含め、挿入詞 SI/WeS の用法は、同じくメタ言語的挿入詞 if you will と if you like のそれとかなり重複するところがあるだろう。前者は Brinton (2008: 162-166)、後者は Elder (2015: 61-66)、松尾・廣瀬・西川 (2013: 292f.) をそれぞれ参照。

[the sheriff] confess with regret,” he said in his best manner, “that I know little about your profession, Professor.” “I haven’t been teaching for years, so the ‘professor’ is—shall we say—vestigial,” Mr. Hawthorne said after a thoughtful sip from his glass. (COHA, 1970s, Fiction; 角がっこ内は筆者)

最後に、「表現模索」と「陳述緩和」のどちらにも解釈できる「あいまい」の事例を挙げる。単独修飾型では「あいまい」の事例は少ない。(16a, b)では、筆者はそれぞれ very lucky, adequate と言えるか迷って SI/WeS を使っているかもしれないし、「異論はあるかもしれないが」という hedge として用いているかもしれない。

- (16) a. But I believe the Case of First-sight Love often operates alike in both Sexes, and the same Inconveniencies may arise to both, from a Rashness of this kind: And where it is so, it will be very lucky, **shall I say?** if either Gentleman or Lady find Reason, on cool Reflection, to approve a Choice, which they were so ready to make without Thought. (EECO, 1742, S. Richardson, *Pamela*)
- b. How the project will turn out as a business venture is another open question. Informed outsiders told me that Mrs. Segal’s equity is now probably worth something more than \$1 million: an adequate, **shall we say**, rate of growth from her original \$19,000 investment eleven years ago. (COHA, 1970s, Magazine)

以上、(C)型と単独修飾型のそれぞれについて、「表現模索」、「陳述緩和」そして「あいまい」の範疇に属すると考えられる事例を提示してきた。3つの範疇に分類するに当たっては、「表現模索」のみで「陳述緩和」の意図は筆者にないのか微妙なものもあったが、多少なりともその意図が感じられる事例は「あいまい」の範疇に含めた。分類の目的は、既に述べたように、(C)型では「表現模索」、単独修飾型では「陳述緩和」もしくは「あいまい」にそれぞれ解釈される傾向があるか、を調査することにあつた。すると、ある事例が「表現模索」でのみで用いられているかの点が押さえられているかがまずは重要になるが、この点はかなり妥当な判断ができたのではないかと考えている。

さて、調査結果を表3と表4に示そう。表3は The Times 紙を除いた EEBO から BNC までの、表4は COHA の集計表である。それぞれ SIS(左側)と SWeS(右側)に分けて提示してある。表3の SWeS の19世紀前半(GB)の欄がアステリスク(*)となっているのは、注10で触れた通り、データ収集時の該当例の記録漏れによる。また、表4の COHA のデータはその件数の少なさから、40年ごと(1900-1929年は30年)の件数を示してある。

まず、(C)型の用法分布からみてみよう。件数がより揃っている期間(網掛け部分)に着目すると⁽¹⁷⁾、表3の SIS、表4の SI/WeS では「表現模索」の用法が占める比率がか

(17)「合計」が6件以上のものを網掛けにした。

表3 修飾型別用法の分布 [EEBO, ECCO, GB, BNC]

SIS

換言付き修飾型 (C)

	1650-1670	1692-1750	1751-1800	1801-1830	BNC
表現模索	64 (96%)	2 (67%)	13 (87%)	9 (82%)	0
陳述緩和	0	0	1	2	0
あいまい	3	1	1	0	0
合計	67	3	15	11	0

SWeS

換言付き修飾型 (C)

	1650-1670	1692-1750	1751-1800	1801-1830	BNC
表現模索	1	0	0	*	3 (100%)
陳述緩和	0	0	0	*	0
あいまい	0	0	1	*	0
合計	1	0	1		3

単独修飾型 (A) (B)

	1650-1670	1692-1750	1751-1800	1801-1830	BNC
表現模索	3 (60%)	0 (0%)	3 (38%)	3 (43%)	2 (67%)
陳述緩和	1	0	2	1	0
あいまい	1	1	3	3	1
合計	5	1	8	7	3

単独修飾型 (A) (B)

	1650-1670	1692-1750	1751-1800	1801-1830	BNC
表現模索	0	0	0	*	9 (19%)
陳述緩和	0	0	0	*	23
あいまい	0	0	0	*	16
合計	0	0	0		48

表4 修飾型別用法の分布 [COHA]

SIS

換言付き修飾型 (C)

	1820-59	1860-99	1900-29	1930-69	1970-2009
表現模索	5 (83%)	10 (91%)	11 (79%)	2 (50%)	2 (67%)
陳述緩和	0	0	1	1	0
あいまい	1	1	2	1	1
合計	6	11	14	4	3

SWeS

換言付き修飾型 (C)

	1820-59	1860-99	1900-29	1930-69	1970-2009
表現模索	3 (100%)	5 (83%)	11 (73%)	8 (89%)	2 (67%)
陳述緩和	0	0	0	0	1
あいまい	0	1	4	1	0
合計	3	6	15	9	3

単独修飾型 (A) (B)

	1820-59	1860-99	1900-29	1930-69	1970-2009
表現模索	2 (33%)	8 (73%)	4 (44%)	6 (46%)	1 (20%)
陳述緩和	2	3	1	2	2
あいまい	2	0	4	5	2
合計	6	11	9	13	5

単独修飾型 (A) (B)

	1820-59	1860-99	1900-29	1930-69	1970-2009
表現模索	0 (0%)	5 (71%)	3 (60%)	16 (25%)	17 (21%)
陳述緩和	2	1	2	33	46
あいまい	2	1	0	15	17
合計	4	7	5	48	63

なり高く、(C)型は「表現模索」の用法で使われる傾向が通時的に高いことが分かる。次に単独修飾型について検討すると、「表現模索」の比率は、表4のSISの1860-99年とSWeSの1860-99年の期間は高いものの、表3、表4とも全体的に(C)型の場合と比べてより低く、「陳述緩和」もしくは「あいまい」で用いられる可能性がより高いことが分かる。とりわけこの傾向はPDEで標準的な、SWeSの単独修飾型に顕著に表れている。このタイプはBNCでもCOHAでも、PDEではその8割方は、「陳述緩和」もしくはそれと解釈される可能性がある。しかも、PDEでは(C)型はごくまれであることから、この挿入詞はPDEに至り、いっそう「陳述緩和」に用いられるようになったと言える。

4. 挿入詞 SI/WeS の2つの変化と間主観化

本節では、2節で述べたSI/WeSの2つの通時的变化、つまり、(C)型から単独修飾型

が、そして SIS から SWeS が好まれるようになる変化は、Traugott (2003, 2010) や Traugott and Dasher (2002) の意味での間主観化の現れとして捉えられることを主張する⁽¹⁸⁾。Traugott の間主観化とはある語彙・表現がより間主観性 (intersubjectivity) を帯びることだが、Traugott (2003: 128) は間主観性を (17) のように定義している。

- (17) [I]ntersubjectivity is the explicit expressions of the SP/W's attention of the 'self' of addressee/reader in both an epistemic sense (paying attention to their presumed attitudes to the content of what is said), and in a more social sense (paying attention to their 'face' or 'image needs' associated with social stance and identity).

(17) の SP/W とは話し手 (書き手) のことだが、すると、間主観性とは、話し手 (書き手) が、その伝達内容に対する聞き手 (読み手) の態度やその受け取り方、その face に配慮した表現と言えよう。一言で言えば、対人配慮の表現ということだろう。Traugott and Dasher (2002) の4章では談話標識 discourse marker (DM) として確立した副詞類は、しばしば間主観化していることが述べられているが、ここではその中で actually を例にとり間主観化の発現をみてみよう。Actually はまず15世紀に「事実上、実質的に」の意味の様態副詞として始まり、それが18世紀半ばに (18a)、19世紀初めに (18b) のような、文副詞の用法を発達させた (同書 pp. 169f.)。

- (18) a. **Actually**, I will drive you to the dentist. (Traugott 2003: 129)
 b. In the middle of the complaint I started to worry that maybe I shouldn't be saying anything. And **actually** I said to myself, "boy, I sound like a complainer." You know, when a person complains a lot, that bothers me. When 'm down I tend to complain more. But I said, "I'm really tired of working with these people." **Actually** I even embellished the complaint.
 (Traugott and Dasher 2002: 170)

Traugott (2003) は、(18a) の actually は、話し手に歯医者に連れて行ってもらう必要はないとか、他の誰かが連れて行ってくれるという聞き手の予測がある状況で、「それでも、ともかく (連れて行きますよ。)」という譲歩的な意味を伝える (Traugott and Dasher 2002: 22 も参照)。また、(18b) では、actually は先行文の内容を「それどころか」のような意味でさらに補強していることが読み手に合図されている。(18a, b) のいずれの actually も、当該の文と先行文とのつながり方を解釈する手掛かりを聞き手・読み手に与

(18) 山崎 (2018) の査読者は、当該の挿入詞は、「表現の選択判断に関わる話し手 (書き手) の発話伝達態度としての表現模索 (…) から始まり、聞き手 (読み手) の心的態度のあり方に配慮した陳述緩和 (この機能は、表現の選択判断に関わる話し手 (書き手) の保留条件を合図する発話伝達態度の一種) へと、相互主観的機能 (「間主観的」を意図されていると思われる (筆者)) を発達させた」という分析を示された。理にかなった分析と考えられるが、本稿ではこれとはやや異なる観点から、この挿入詞の間主観化を論じることになる。

えているという意味において、間主観的と言える (Traugott and Dasher 2002: 174)。

さらに、actually の間主観的用法で分かりやすいのは、おそらく、(19) のような actually の聞き手に配慮した hedge としての用法かもしれない。英英辞典の記述より引用する。

(19) a. used to correct somebody in a polite way

We're not American, **actually**. We're Canadian.

b. used to get somebody's attention, to introduce a new topic or to say something that somebody may not like, in a polite way

Actually, I'm busy at the moment—can I call you back?

(*Oxford Advanced Learner's Dictionary*, 9th Edition, s.v. *actually* 3, 4)

いずれも相手の face に配慮した表現として機能している⁽¹⁹⁾。

間主観化の定義と事例を確認したところで、まず、SIS から SWeS への変化に間主観化がどう関わっているかについて考えてみよう。ここでは、SIS と SWeS それぞれが表す意味やニュアンスを間主観性の観点から検討してみたい。まず、SIS の shall I はそもそも相手の意向を尋ねて would you like me to... を表すとされる。相手の意向を尋ねることは、ある意味相手を尊重することにつながり、その意味でこの用法は間主観的と言えるかもしれない。問題はこの意味・用法が挿入詞の SIS/SWeS にも引き継がれているかであるが、「表現模索」用法は適切な表現選択に際しての話し手（書き手）の個人的な迷いを表すのが基本であるので、「表現模索」ではその意味は希薄と思われる。しかし、「陳述緩和」用法では、hedge として用いたり、特殊な言い方を合図する対人配慮が深く関わることから、この相手の意向を何う間主観的な意味合いがそこには引き継がれていると想定することもできるかもしれない。

一方、SWeS の shall we には、いわゆる inclusive 'we' と exclusive 'we' の用法がある (Quirk, *et al.* 1985: 815)。Shall we say の場合は、話し手（書き手）は基本的には当人ひとりであるから（つまり、通常のコミュニケーションでは would you like me to say... が通例で、would you like us to say... はまれ）、ここでの we は exclusive 'we' ではなく、聞き手（読み手）を含む inclusive 'we' (let's say...) と理解するのがより自然だと考えられる。すると、inclusive 'we' を含む shall we say は、あたかも当該の表現を聞き手（読み手）と一緒に用いることを誘うような言い方になる。この聞き手（読み手）を巻き込む表現法は、Brown and Levinson (1987) の言う positive politeness strategy (Strategy 12: Include both S(peaker) and H(earer) in the activity 127f. 参照) に寄与し、face に配慮した間主観的な表現と言える。そして、この inclusive 'shall we' の間主観的な対人巻き込み効果は、挿入詞 SWeS にも引き継がれたものと思われる。SWeS にはこの

(19) Traugott and Dasher (2002) では、他に actually と類義の indeed と in fact, DM well 等の間主観化の過程が論じられている。先に触れた Brinton (2008) には attention-getter としての DM (I) say の間主観化が論じられている。また、López-Couso (2010) は、(問)主観化が異なる言語の様々な表現に広くみられる現象であることを先行研究より紹介している。

効果があったからこそ、それはまず「表現模索」で SIS と並んで用いられるようになり⁽²⁰⁾、20 世紀前半には「陳述緩和」に解釈される可能性がより高い単独修飾型で特に好んで用いられるようになったものと考えられる⁽²¹⁾。まとめると、SIS はその「陳述緩和」用法では間主観性が認められる可能性があるが、一方で、SWeS は「表現模索」と「陳述緩和」用法の双方に間主観性が認められると考えられることから、より間主観性が高い。すると、この挿入詞の SIS から SWeS への変化は、より間主観性が高い表現への移行と捉えられ、また、この点でこの挿入詞はより間主観性を高めた、と言えよう。

次に、この挿入詞が歴史的に (C) 型から単独修飾型へ移行したことを間主観化の観点から考えてみよう。3 節で検討したように、(C) 型は通時的に「表現模索」の用法で用いられる傾向が強い。そして、(C) 型は 17 世紀では SIS が標準で、その後も 19 世紀のある時期まではそれが優勢であったこと (表 1 と表 2 参照) も考慮すると、それは基本的に話し手 (書き手) による個人的な「表現模索」と言える。この状況は、話し手 (書き手) の当該の表現を用いることに対する迷いが表されていて、Traugott のいう、主観化 (subjectification) が関わる段階と言えよう。彼女の言う主観化とは、話し手 (書き手) の視点や態度 (perspectives and attitudes) が言語形式の意味に反映される現象をいう。例えば、挿入詞の I promise you には、事態が起こることに対する話し手の確信が反映される (Traugott and Dasher 2002: 206f.)。同様に、「表現模索」では話し手の迷いが反映されていて、これは主観化の段階と捉えることもできよう。

一方、単独修飾型は「陳述緩和」の用法との結びつきが当初より比較的強く、その傾向は PDE になるにつれ顕著となる。そして、COHA では 1930 年代より急速に単独修飾型が伸長し、PDE では COHA でも BNC でも、ほぼこの型で使用されるようになっている。これはつまり、この挿入詞は、歴史的により「陳述緩和」で使われる可能性が高くなったということである。「陳述緩和」の用法は典型的には hedge としての用法があり、これはまさしく間主観的な用法であるから、この傾向は間主観化と言えよう。確かに、3 節にて「陳述緩和」とした用法には hedge の他に、洒落や通常とは異なる言い方に聞き手 (読み手) の注意を喚起する用法や婉曲表現を導入する用法もあった。しかし、これらも、文字通りとは異なる言い方であることをメタ言語的に聞き手 (読み手) に合図しているわけであるから、相手の理解を助ける配慮であることは間違いない。つまり、(C) 型の「表現模索」との、単独修飾型の「陳述緩和」との親和性に着目すると、この挿入詞の (C) 型から単独修飾型への変化にも間主観化が関わるのが分かる。

なお、Traugott (2003; 2010 他) は、間主観化は主観化を経て起こるとしているが、この挿入詞の場合もこのことが当てはまると考えられる。つまり、BYU-EEBO での調査 (注 11 参照) ではこの挿入詞の初例は 1540 年代の SIS の (C) 型の「表現模索」の事例である。そして、17 紀初頭までの (C) 型の事例は、1610 年代の「あいまい」と考えられる 1 例を除いて、そのすべてが「表現模索」だと考えられる。一方、単独修飾型の初例は 1580

(20) SWeS による「表現模索」は、本来は話し手 (書き手) による個人的な表現模索であるものを、あたかも当該の表現 (host) を聞き手 (読み手) も一緒に用いることを誘うように表現にしていることになる。

(21) 陳述緩和に inclusive 'we' が有効であることについては、やはり inclusive 'we' を含む let's 命令文を使って食事を促す、Let's get on with dinner, eh? (Brown and Levinson 1987: 127) のような事例を想起されたい。

年代であったが、こちらは「陳述緩和」の用法と考えられる⁽²²⁾。つまり、間主観的な「陳述緩和」の事例は少し遅れて(40年ほどの違いであるが)確認されることになる。そして、この挿入詞はその後も当面は「表現模索」になりやすい(C)型で用いられることが多かったことを考慮すると、その間主観化は主観化を経て徐々に進行したものと考えられる。

まとめ

本稿では、山崎(2018)で指摘された、挿入詞 SI/WeS にみられる通時的变化に関して、2つの考察を行った。ひとつは、山崎(2018)では、この挿入詞の(C)型は「表現模索」に、一方、その単独修飾型は「陳述緩和」もしくは「あいまい」に解釈される傾向があることが指摘されたが、その検証を行った。イギリス英語の異なる時代のデータベースと COHA の実例を文脈の中で検討した結果、当該の傾向が存在することが確認された。これにより、この挿入詞は(C)型から単独修飾型での使用への移行に伴い、「表現模索」よりも「陳述緩和」でより用いられやすくなったことが確認されたことになる。

また、本稿では、山崎(2018)で指摘された、挿入詞 SI/WeS の2つの変化、つまり、SIS から SWeS、そして(C)型から単独修飾型への通時的变化には、共に間主観化が関わっていることを論じた。まず、SIS から SWeS への変化と間主観化の関連では、SIS と SWeS とで異なるのは、SWeS は inclusive 'we' を含む点である。この inclusive 'we' は相手を巻き込み、相手に関わる言い方となることから、positive politeness につながる。これはまさに間主観的な表現法であり、SIS から SWeS への変化には間主観化が関わり、この点でこの挿入詞はより間主観的になったことを指摘した。もうひとつの変化は、(C)型から単独修飾型が好まれるようになる傾向であるが、ここにも間主観化を見て取れることを論じた。本稿では、(C)型は「表現模索」の解釈、単独修飾型は「陳述緩和」もしくは「あいまい」の解釈との親和性があることを、それぞれ異なる時期の実例にて確認した。「表現模索」は基本的に話し手(書き手)による個人的な適切な表現の模索で、主観的であるが、「陳述緩和」用法には何らかの意味で話し手(書き手)による聞き手(読み手)に対する配慮が関わるので、こちらは間主観的である。すると、この挿入詞の(C)型から単独修飾型への変化にも間主観化が関わることになる。

[コーパス・データベース・オンライン辞書]

BYU-EEBO: <https://corpus.byu.edu/eebo/>

BNCweb: <http://bncweb.lancs.ac.uk/bncwebSignup/user/login.php/>

Corpus of Historical American English (COHA): <https://corpus.byu.edu/coha/>

Collins English Dictionary (CED), online: <https://www.collinsdictionary.com/dictionary/english/>

Eighteenth Century Collections on Online (ECCO): <https://quod.lib.umich.edu/e/ecco/>

(22) 17世紀初頭までの4例の単独修飾型の実例の内、初例を含めて3例は「陳述緩和」または「あいまい」と判断される。単独修飾型が「陳述緩和」に用いられる傾向は当初からのものと言えよう。

Early English Books Online (EEBO): <https://quod.lib.umich.edu/e/eebogroup/>
Oxford English Dictionary, Third Edition (OED3), online: <http://www.oed.com/>
The Times Digital Archive: <http://gale.cengage.co.uk/times.aspx/>

[参考文献]

- Brinton, Laurel J. (2008) *The Comment Clause in English: Syntactic Origins and Pragmatic Development*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Use*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Dehé, Nicole (2014) *Parentheticals in Spoken English: The Syntax-Prosody Relation*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Elder, Chi-Hé (2015) "Classifying conditionals: The case of metalinguistic *if you like*," *Cambridge Occasional Papers in Linguistics* 7, 61-82.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge.
- López-Couso, María José (2010) "Subjectification and intersubjectification," in Andreas H. Jucker and Irma Taavitsainen eds., *Historical pragmatics*, Handbook of Pragmatics Vol. 8, Mouton De Gruyter, Berlin, 127-163.
- 松尾文子・廣瀬浩三・西川眞由美 (2015) 『英語談話標識用法辞典』研究社出版, 東京.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, Harlow.
- Traugott, Elizabeth C. (2003) "From subjectification to intersubjectification," in Raymond Hickey, ed., *Motives for Language Change*, Cambridge University Press, Cambridge, 124-139.
- Traugott Elizabeth C. (2010) "Revisiting subjectification and intersubjectification," in Kristin Davidse, Lieven Vandelanotte and Hubert Cuyckens, eds., *Subjectification, Intersubjectification and Grammaticalization*, Mouton De Gruyter, Berlin, 29-70.
- Traugott Elizabeth C. and Richard B. Dasher (2002) *Regularity in Semantic Change*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 山崎聡 (2018) 「挿入詞 Shall I/We Say の変化」『近代英語研究』第34号, 35-43.

(2018.9.13 受稿, 2018.10.27 受理)

〔抄 録〕

本稿では、山崎（2018）で指摘された、挿入詞 shall I/we say(以下、SI/WeS)にみられる通時的変化に関して、2つの考察を行った。山崎（2018）では、この挿入詞のより古い形式である、挿入詞の host の言い換えを含む形式（以下、換言付き修飾型）は話し手（書き手）が適切な表現を模索する「表現模索」に、一方、挿入詞が単独で host を修飾する形式（以下、単独修飾型）は「陳述緩和」もしくは「あいまい」に解釈される傾向があることが指摘されたが、本稿は、それを異なる時期の用例で検討・確認した。

また、本稿は、山崎（2018）で指摘された、挿入詞 SI/WeS の2つの変化、つまり、SIS から SWeS へ、そして換言付き修飾型から単独修飾型への通時的変化には、共に間主観化が関わっていることを論じた。SIS から SWeS への変化と間主観化の関連では、SWeS は inclusive 'we' を含むことから、positive politeness につながり、間主観的であり、SIS から SWeS への変化は間主観化の現れと捉えることができた。一方の、換言付き修飾型から単独修飾型への変化では、前者は主観的な「表現模索」で、後者は話し手（書き手）による聞き手（読み手）に対する配慮が関わる間主観的な「陳述緩和」でそれぞれ用いられる傾向がみられることから、換言付き修飾型から単独修飾型への変化にも間主観化が関わるとした。